

負けた側の声をいかに伝えるか

橋爪大三郎 (東京工業大学教授)

歴史が暗記中心の科目になるのは、やむをえないとは言え、残念なことである。歴史の中には、いくつもの分岐点があり、当事者に予想できなかった結末があり、失意のうちに敗れ去った者たちがいる。そうした屈折を見ることができず、歴史がただ一枚の年表のようにしか見え

ないとしたら、歴史を学ぶ意味のあらかたは失われてしまう。人びとは社会のあり方についてさまざまに思い描くことができる。だが、現実とは異なる。さまざまな可能性(選択肢)のなかから、ただひとつの現実を作り出す作用を、政治とよぶことができ

ると考えた(橋爪大三郎『政治の教室』P.H.P新書)。歴史はこの意味で、政治(意思決定)の連続である。年表の背後には、排除された選択肢、現実になりそこなつた想念がびっしりと詰まっている。戦争も政治と同じであろう。意思決定の手續きが存在しない場合、問題は政治

の枠をはみ出して、実力のぶつかり合いとなる。あい争う双方は、相手を排除して勝ちを収めるつもりで行動を起こす。敗れたのちは野に屍をさらすにせよ逃げのびるにせよ、勝者の意が行われることにははや異を唱えない。こうしてひと通りの現実が織りだされていく。

そこで、歴史のかなりの部分は、戦争によって占められることになる(偉人や軍人や政治家ではなく)、民衆の歴史が歴史だ、などというかけ声は間違っている。過ぎ去った戦争をふり返る場合、その結末がわかっているのに、戦争のもつと



1945年の敗戦をどのように記述できるか

も本質的な部分——不透明な未来を前に、実存を賭ける投企としての戦い——が見えなくなりがちである。勝利する側にはそれだけの、敗れる側にもそれなりの理由がある。にもかかわらず戦いは、現実の浮遊する感覚をとまなう、不確実な賭けである。その不確実性を追体験するには、敗れた側が何を考えていたのかを丁寧に理解しなければならぬ。

私の父方の曾祖父は、戊辰戦争で戦死し、その後一家は辛酸をなめた。明治政府に対する敗者の側からの不信と異議がファミリーヒストリーのかたちで子孫に伝えられた。敗れた側は名誉を奪われ、事実を歴史として語り伝える資格をなくしてしまふ。さまざまな戦争や政争のたびごと起きたことであろう。

『平家物語』を愛した日本人は、敗者に対する柔軟な想像力を、もともと大事にしてきた。だがそれは、生き残ったものが滅び去るものに対して抱く感傷のかたちをとり、敗れたものがそれでも生き続ける、リアリズムのかたちをとらなかつ



橋爪大三郎氏
1948年神奈川県生まれ
東京大学文学部社会学科
卒 著書に『その先の日本
国へ』『世界がわかる
宗教社会学入門』など

た。

水戸藩が編纂を試みた『大日本史』は、南朝が正統でありながら敗れた理由をのべることに苦慮した。正しいもの、優れたものがつねに勝つとは限らない。それなら歴史は、勝敗を度外視してあるべき世界を描き出す、超越的な視点を持つべきなのだろうか。それとも、勝者の世界観を追認していくだけでよいのだろうか。

日本の歴史学が試されるのは、それゆえ、一九四五年の敗戦をどのように記述できるかであろう。一九四一年に大東亜戦争という名で始まった戦争は、一九四五年を境に太平洋戦争と呼び変えられた。名前だけではない。戦前の世界観は、非民主的で反欧米的で軍国主義的なものとして、徹底的に斥けられた。戦後の言論

は、戦前との連続性を絶たれ、根拠を根こそぎ奪われたところから出発した。歴史学も、例外ではない。

戦争の勝者は、世界観を改める必要がない。いっぽう敗者は、しばしば世界観を改めることを強いられる。日本人はこれまで、明治維新を含め、戦争の勝者と敗者に分かれたかもしれないが、勝者の側では世界観の連続性を保ってきた。それゆえ、歴史の記述に困難を感じないですんできた。一九四五年に初めて、日本の全体が敗れるという経験をした。一九四五年の前後で、世界観を不変に保って

いるのは、勝者のアメリカである。日本人はこの戦争を記述するのに、アメリカという外の視点を必要とする。だがそれでは、日本人が自ら、この戦争を歴史認識したことになるのではないか。

加藤典洋氏が画期的な『敗戦後論』(一九九七年)を著し、その加藤氏と私は討論を行った(『天皇の戦争責任』二〇〇〇年)。そのテーマは、戦前と戦後の連続性をどのように考えるかである。加藤氏は、三〇〇万の死者をまず哀悼することがその出発点になるとのべ、私は、それらの人びとが公人としての義務を果

たした事実を、戦後の価値観からストーリーに肯定できるとのべた。戦後の言論を、戦前との連続性のうえに再構築すること、歴史は再生できる。だがこの試みは、まだ始まったばかりである。

中学や高校の日本史で、近現代史は、時間切れでほとんど教えられないことになっている。それは日本の歴史家が、一九四五年の敗戦から目を背けている結果である。古文書を解説する実証的な身振りにはもういいから、せめて優れた何人かが近現代の通史を書いてほしい。